

6/12(土) まいど! 倫理号です。 雨と梅雨らしい天候になりました。
「雨の日は雨をききつ 風の日も風をききつ よろこんで生きる」……。

今週の

倫理

幸せ導ぶアホ鳥

2021. 6. 12~6. 18

6月のテーマ | 天候気候を受け入れる

1233号

北から南に細長く弓なす地形の日本列島には、春夏秋冬の移ろいがあります。四季という言葉は美しく、穏やかな印象を与えますが、四季を織りなす大自然は、それだけでは不十分な事実でしょう。

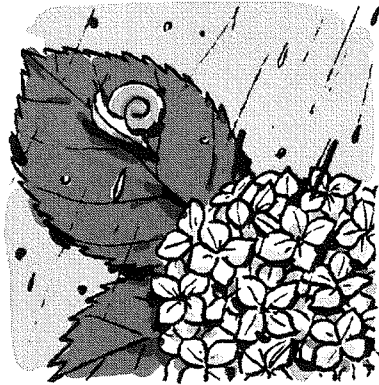
鹿児島県の大隅半島の北西に位置するのが活火山・桜島です。年間の噴火回数は数十回の年もあれば、千回近くを数えることもあり、通年活動する桜島の火山灰は、風の流れにより降灰の地域が変り、その量によつては目を開けられないほどの時もあり、県民の生活に多大な影響を与えてきました。また、同県は例年台風の通り道でもあり、過去には家屋の崩壊、川の氾濫等、甚大な被害を経験しました。

大隅半島中部・鹿屋市には九州南部最大のシラス台地・笠野原が存在します。火山灰の蓄積で形成された笠野原台地は、水はけが良過ぎるため保水性に乏しく、作物の栽培が向かない土地でした。シラス台地で栽培されたのは、サツマイモ、ダイズ、ナタネなどの乾燥に強い畑作物で、過去には「水のない不毛の大地」と呼ばれました。

国営の灌漑事業によりダムから台地に水が行き渡り、その後の研究・開発で、多くの作物が栽培されるようになったのです。作物は飼料にもなり、今では質の高い黒豚・黒牛の畜産も盛んです。

大自然は、人の生活を豊かにすると共に、天候気候や火山活動、地震等の天災により、甚大な影響をももたらしてきました。

鹿児島が生んだ偉人・西郷南洲翁は、県



雨の日は 雨をききつつ…

民の心に今も生き続けています。南洲翁を敬愛する人の自宅には、「敬天愛人」の額装を見受けることがあります。この言葉は、「道は天地自然の物にして、人は之れを行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也」(南洲翁遺訓に学ぶ) / 公益財団法人荘内南洲会)と教えます。

同県の人々は桜島や自然から生じる事象に生活を左右されながらも、県の象徴として桜島を仰ぎ、自然の下で生きてきました。天災のみならず、人生の中で様々な形で試験は訪れます。私たちは目前の事象にどのように相対すればよいのでしょうか。

倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋は、学生時代に小説家を夢みて勉学に励みました。しかし、時代に翻弄され、道半ばで中国に出征し、帰国後も参謀本部の特殊任務に就きました。終戦後、母校に復学し、卒業目前に第八高等学校(現名古屋大学)の哲学・ドイツ語の教諭職の話を受けました。

しかし、父・丸山敏雄が倫理研究所の前身である新世会を設立し、身を賭して業務に取り組む姿を見て、教諭職に就くことを断ち、父の手助けをする決意をしました。倫理研究所理事長の役を永年に亘り経験する中で、次の短歌を詠んでいます。

雨の日は雨をききつつ 風の日も風を聞きつつ よろこんで生きる

自然や時代の変化の中に身を置きながら、自然を畏れ敬い、その状況に順応した、先人らの示唆を、生活の糧にしたいものです。